



小栗上野介情報71

ホームページHttp : //tozenji.cside.com/ Eメール : tozenji@clock.ocn.ne.jp

2018(平成30)年7月
発行:東善寺 住職 村上泰賢
群馬県高崎市倉渕町権田169
〒370-3401
Tel・fax:027-378-2230
〒振替0120-1-406206東善寺

民生を大事にし「真の武士」をめざした小栗上野介

「真の武士」は、何が民のため国のためになるかを考え実行する

観音山用水と小高用水

観音山用水

小栗忠順は幕府解散で幕府に知行地上州権田村への「帰農願」を提出し、「帰農勝手たるべし」との許可があつて



▲観音山に屋敷を建設 清水一衛画

慶応四年三月一日に権田村東善寺に到着した。若者に新しい教育を伝えることを目指し、観音山に屋敷の建

設を進め、小至沢を測量して水のない観音山にたちまち水を引いた。測量は養子又一あるいは家臣が横須賀製鉄所の建設工事を指導していたフランス人から教わったフランス式測量法と思われる。(現在の日本の測量法はドイツ式が主流)

ひとまたぎできる用水に言いがかり

小栗主従殺害後、高崎には「…廻りへ土手を築き、堀を廻し水を満々とため…」とする文書が残る。また倉渕村と合併する直前に刊行された高崎市の『高崎市史 通史編』では、小栗一家があたかも西軍への抵抗拠点を構築するため権田村に移住したように思わせぶりの解説をしている。



ひとまた
▲一跨ぎできる用水に「水を満々とためた堀」と言いがかりをつけた

権田村移住は帰農のため

・家族ぐるみで移住

小栗一家のほか、家臣塚本真彦も老母や赤ん坊と幼女三名を含めた家族ぐるみで移住した。西軍への抵抗拠点構築に家族ぐるみで移住する者がいるだろうか。

・お茶と生糸

「帰農願」で知行地返上も幕府に申し出て、お茶と養蚕で生計を立てる計画だった考えられる。上州は養蚕が盛んであるから、お茶の木だけ江戸から運び、いまでも小栗一家の夢を伝えるかのようにお茶の木が観音山の所々に残っている。養蚕の地上州—権田村を選んだ理由の一つが養蚕にあったと思われる。

・植木類を運ぶ

小栗主従が殺害されたあと、たくさんの植木類が江戸から倉賀野河岸に着いた。東善寺境内には黒椿とシャクヤク、高崎市引間の大山家にはソテツ、下斉田にも幾種かの植木類が残されている。

・小高用水測量 ページ右上へ



▲観音山のお茶の木

「真の武士」は国民ファースト

観音山にたちまち用水をひいたのを見て驚いた小高集落の人々は、「うちの地区は

水が細くて大雨が降らないと田植えが出来ない、ぜひ…」と訴えた。快く引き受けた小栗忠順は、家臣に

命じて稲瀬沢から尾根を回り込んで水を引くルートで測量させた。『小栗日記』で二度測量の様子を視察していることがわかる。

小栗忠順は「たとえ国が滅びても、この身が倒れるまで公事に尽くすのが真の武士である」という言葉を残している。

「公事に尽くす」とは常に国民のためになることを考え、小さなことでも実行する姿勢を貫くことであろう。もし抵抗拠点づくりで権田村へ移住したなら、用水測量など引き受ける余裕はあるまい。



▼稲瀬沢の取入口 ここから左へパイプで取り入れる

今も生活基盤

測量をほぼ終えた頃、慶応四年 閏 四月六日に小栗主従は西軍によって殺害されてしまう。その後、小高の

人々が共同作業で測量ルートに従って開削し完成させたのであろう。戦後は別の用水も加えて活用しているが、現在も小高地区の田を潤す大事な生活基盤であることに変わらない。



◀ 砂溜り(沈砂池) 砂やゴミを除去する

用水を守って150年

取り入れ口の杉に「水番札」が下がっている。いまでも小高の人々は毎戸の順番で水番札を持って水路の様子を点検し、取入口まで来ると落ち葉やゴミを取り、砂の様子を確認し、水番札を取り替え次の家に札を届けている。

150年経った現在も、「小栗様が造ってくれた水路」として大事に守り続けている。歴史は今も生きている。

▶ 水番札 杉木立に囲まれた取り入れ口に下がっている



「罪なくして斬らる」**非命歿後150年**

小栗まつり

5月27日

◆「明治維新150年」ではありません。小栗主従が明治政府軍に殺されて150年



◀ **▲墓前祭** 線香を手向ける参加者

好天に恵まれた命日の27日(慶応四年閏四月六日)、小栗上野介顕彰会主催・東善寺共催で小栗主従と殉難の村人の150年(151回忌)小栗まつりが行われた。

式典 午前10時～ 倉渕小学校

挨拶 市川平治会長／祝辞 のあと公開記念講演が行われた。

公開記念講演 「歴史作家・技術者から見た幕末

明治維新～小野友五郎と小栗忠順の生涯に光を当てて～」 歴史作家 鳴海 風 氏



▲講演する鳴海風氏

作家であり、機械工学の技術者でもある講師の目から見た小野友五郎と小栗上野介の生涯をわかりやすく語った。ペリー来航以来の急速な日本近代化は幕府と佐賀藩や多くの無名の人達が手がけていた。また幕末にすでに小栗らの遣米使節をはじめ、7つの海外使節団や留学生が欧米にでかけて近代社会を見てきている。明治以後は岩倉米欧使節団が出たが、外交がまずくて交渉はできず、帰国したときは「視察団」に名称が変わっていた。岩倉使節団が8人の少女を留学生として同行させたのは評価できるが、津田梅子(津田塾大学創始者)らを渡航留学させた父たちはほとんどが旧幕府が派遣した海外経験者だった。一など興味深い話だった。

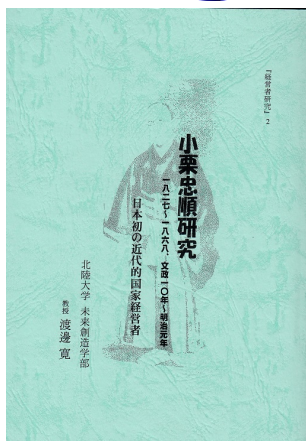
墓前祭 東善寺 150年前に罪なくして西軍に殺害された小栗主従と殉難の村人にお線香を手向ける参加者の列が続いた。

記念演奏会 倉渕中学校吹奏楽部と群馬マンドリン楽団による演奏があった。

昼市 今年もたくさんのお店が出て、参加者とのふれあいの場となった。
◆ボランティアの皆さんお世話になりました。



本



北陸大学 未来創造学部 教授 渡邊 寛 著 A5版 400p

『小栗忠順研究』 私家版

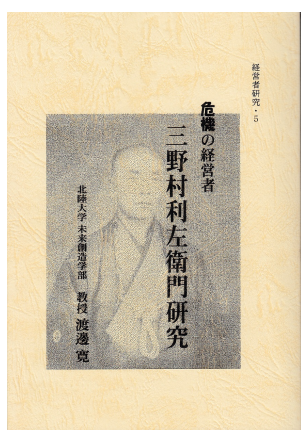
東善寺で限定数販売 2,000円

小栗上野介は烏川のほとりで殺され、さらに明治政府によってその業績が無視抹殺され、結局二度殺されたとする著者は、経営学の視点から業績を掘り下げている。横須賀製鉄所の建設・運営に際してヴェルニーが提案する組織とその運用を受け入れ、ヴェルニーに運営を委ねたのはヴェルニーへの篤い信頼、失敗すれば腹を切る覚悟と製鉄所建設にける小栗の熱意の表れで、労働時間・年功給・能率給・複式簿記等近代経営が日本に根づく契機となった。

北陸大学 未来創造学部 教授 渡邊 寛 著

『三野村利左衛門研究』 私家版 A5版 351p

東善寺で限定数販売 2,000円



豪商三井が幕末の動乱期を乗り切れたのは、小栗の愛弟子三野村のおかげと言われ

る。元小栗家の仲間、小商人の身で身分を超えて小栗と信頼関係を築き、三井の依頼を受けてその危機を救ったことから大番頭に採用される。幕府解散・明治維新を乗り切るため三井を新政府支持に舵を切らせ、積極的な協力で新政府の金融事務の主導権を執るようになった。由利公正の太政官札発行による財政政策を支援して後に三井財閥となる地位を築いた。

幕末の歴史や小栗上野介ファンの方へ

会員になってくださいー東善寺「たつなみ会」

倉渕町の小栗上野介顕彰会ではさまざまな顕彰活動をしています。地域の人口減で会員が減っております。東善寺の「たつなみ会」会員には顕彰会機関誌「たつなみ」を発行のつど会から購入してお送りし、誌代が顕彰会の活動資金に役立っています。また東善寺発行の「小栗上野介情報」や「東善寺だより」などで小栗上野介・幕末関連の最新情報をお送りします。□お申込みは東善寺へメールまたは電話・ハガキで

□たつなみ会会費 年1800円

□ご送金は郵便振替「東京東京00120-1-406206東善寺」へ

